



図説日本の古典

第1巻／古事記	武蔵大 学教授	神田秀夫	奈良国立文化 財研究所長	坪井清足	学習院 大学教授	黛 弘道
第2巻／萬葉集	筑波大 学教授	伊藤 博	成城大 学教授	上原 和	学習院 大学教授	黛 弘道
第3巻／日本霊異記	琉球大 学教授	小島瓊禮	文化 庁	上原昭一	東京大 学助教授	笹山晴生
第4巻／古今集・新古今集	東京大 学助教授	久保田 淳	美術 史家	白畑よし	聖心女子 大学教授	目崎徳衛
第5巻／竹取物語・伊勢物語	大阪女子 大学教授	片桐洋一	大谷女子 大学教授	伊藤敏子	聖心女子 大学教授	目崎徳衛
第6巻／蜻蛉日記・枕草子	学習院 大学教授	木村正中	美術 史家	白畑よし	東京大 学教授	土田直鎮
第7巻／源氏物語	東京大 学教授	秋山 虔	学習院 大学教授	秋山光和	東京大 学教授	土田直鎮
第8巻／今昔物語	早稲田 大学教授	国東文麿	美術 史家	梅津次郎	京都女子 大学教授	村井康彦
第9巻／平家物語	神戸大 学名誉教授	永積安明	大阪大 学教授	武田恒夫	京都大 学教授	上横手雅敬
第10巻／方丈記・徒然草	お茶の水女 子大学教授	三木紀人	東京国立文 化財研究所	宮 次男	東京大 学教授	益田 宗
第11巻／太平記	早稲田 大学教授	梶原正昭	東京国立文 化財研究所	宮 次男	京都大 学教授	上横手雅敬
第12巻／能・狂言	東京大 学教授	小山弘志	京都国立 博物館	切畑 健	大阪市立大 学名誉教授	原田伴彦
第13巻／御伽草子	国文学研究 資料館長	市古貞次	美術 史家	高崎富士彦	東北大学 名誉教授	豊田 武
第14巻／芭蕉・蕪村	福岡大 学教授	白石悌三	文化 庁	佐々木丞平	学習院大学 名誉教授	児玉幸多
第15巻／井原西鶴	埼玉大 学教授	長谷川 強	東京大学 名誉教授	山根有三	学習院大学 名誉教授	児玉幸多
第16巻／近松門左衛門	学習院 大学教授	諏訪春雄	大阪大学 助教授	信多純一	横浜市立 大学教授	辻 達也
第17巻／上田秋成	国文学研究 資料館教授	松田 修	名古屋大 学助教授	河野元昭	学習院 大学教授	大石慎三郎
第18巻／京伝・一九・春水	早稲田 大学教授	神保五弥	東京国立 博物館	小林 忠	立正大 学教授	北原 進
第19巻／曲亭馬琴	明治大 学教授	水野 稔	国立国会 図書館	鈴木重三	東京芸芸 大学教授	竹内 誠
第20巻／歌舞伎十八番	早稲田 大学教授	郡司正勝	東京国立 博物館	小林 忠	成城大 学教授	西山松之助

図説日本の古典17 上田秋成

昭和56年1月20日 第1刷印刷

昭和56年2月9日 第1刷発行

著者代表——松田 修 ©1981

発行者——堀内末男

発行所——株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋2-5-10

電話—販売部 東京(03)238-2781

出版部 東京(03)230-6381

振替—15653 郵便番号101

印刷所——大日本印刷株式会社

用紙——王子製紙株式会社

製本——中央精版印刷株式会社

文勇堂製本工業株式会社

製本には十分注意していますが、落丁・乱丁の際は
おとりかえいたします。

0391-167017-3041

Printed in Japan

〈企画委員〉

東京大学教授

秋山 虔

国文学研究資料館長

市古貞次

学習院大学名誉教授

児玉幸多

早稲田大学教授

神保五弥

東京大学名誉教授

山根有三

〈第一七巻・編集委員〉

国文学研究資料館教授

松田 修

名古屋大学助教授

河野元昭

学習院大学教授

大石慎三郎

上田秋成



集英社

目次

●カラー図版●	上田秋成自画像肖像	『海老自画像』	『蟹の図』	秋成自筆自伝	『十二か月絵巻』	『茶先自画像』	冬籠発句	『江の霞』	自筆稿本冒頭
『秋葉図』	『たに水の和歌』	自画像	琵琶湖の竹生島	高野山の玉川	頓正寺殿	『群魚図』	『動植綵絵』の内	『十二か月風物句画巻』	部分
									『瀑布図床貼付』
上田秋成の世界—その伝統の中の個性	松田 修								
伝統性の意味	物語の本義から	もう一つの夜	劇性の構造						

『雨月物語』—作品鑑賞	松田 修
-------------	------

白峰 菊花の約 浅茅が宿 夢応の鯉魚 仏法僧 吉備津の釜 蛇性の淫 青頭巾 貧福論

●図版特集●

秋成の生活と文学の旅	堤 邦彦
------------	------

加島稲荷 献神和歌帖 三郷色分大坂細覧 堂島 曾根崎橋跡 芭蕉吉野行脚図 天の橋立 本居宣長遺宅 花洛名勝図会 寛政歌会 西福寺

『春雨物語』—作品鑑賞	内田保廣
-------------	------

血かたびら 天津処女 海賊 二世の縁 目ひとつの神 死首の咲顔 捨石丸 宮木が塚 歌のほまれ 焚燐

●図版特集●

江戸時代の怪奇画	辻 惟雄
----------	------

『虎図』へ旧金谷屏風の内 須磨 故事人物図巻 部分 寒山拾得図 狩野山雪筆 曾我蕭白筆 雪山童子図 群仙図屏風 右隻 雪中錦鶏図 貝甲図 動植綵絵の内 山姥図 返魂香之図 階段の幽霊 画図百鬼夜行 化物屋敷百物語の図 百物語 こはだ小平次 一ツ屋 浅草寺絵馬

逃亡の文学	松田 修
-------	------

秋成とその文学のキーワード 社会状況の函数として

ロマンの想像力の系譜	野口武彦
------------	------

想像力と夢 人間情念の虚構化 想像力—その秋成以前

秋成の歴史意識 日野龍夫 130
史実への挑戦 虚構による歴史批判 「血かたびら」に託された批判

京画壇と江戸画壇―寛政から幕末へ 河野元昭 141
はじめに 寛政期 文化期 文政期 天保期と弘化以後

●図版特集●
応挙と呉春 河野元昭 165

『四季遊戯図巻』部分／『雪松図屏風』右隻／『若松老松図屏風』左隻（雪中老松図）／『深山大沢図屏風』右隻部分／『山水図襖』部分／『騎驢人物図』部分／『騎馬狩獵図』／『墨梅図壁貼付』・『墨梅図襖』／『梅林図屏風』右隻／『竹雀図襖』部分／『柳鶯群禽図屏風』左隻部分

『胆大小心録』の群像 高田 衛 176
「忿」の秋成 「恕」の秋成 「悠」の秋成

●図版特集●

煎茶道 小川後楽 185
山紫水明処／『梅山種茶譜略』／『売茶翁煎茶図』／『煎茶仕用集』／『清風瑣言』／『嵩山獲茶図』／小川流本格手前莊／『煎茶器名巻』／扇面貼雜山字屏／唐物煎茶碗／『山水図』／煎茶会芳名帖／鬼面涼炉・湯瓶／『小集図録』／『十二か月絵巻』

災害と一揆の時代 192
天明三年浅間焼け 民衆暴動の大型化

自立都市大坂の誕生 208
武家財政の破綻 町人の武士離れ 上方の江戸離れ

上田秋成年譜 島原泰雄 218

凡例

1 古典文学の珠玉の名作を立体的に構成した本シリーズでは、その内容をさらに意義づけるため、その部分の執筆者が各図版の解説にあたったが、それ以外の場合は、とくに解説の末尾に氏名を付記した。

2 本巻の仮名づかいは、原則として現代仮名づかいによった。古文の引用については、歴史的仮名づかいを原則としたが、必要に応じ原本通りとした部分もある。特殊な美術・歴史用語の引用などについては原本通りとした。

3 参考文献を各部分の章末に一括して注記し、読者の便をはかった。

4 各図版に添記した国宝・重文・史跡のうち、重文は重要文化財、史跡は国指定史跡の略である。なお、個人所蔵者名は略させていただいた。

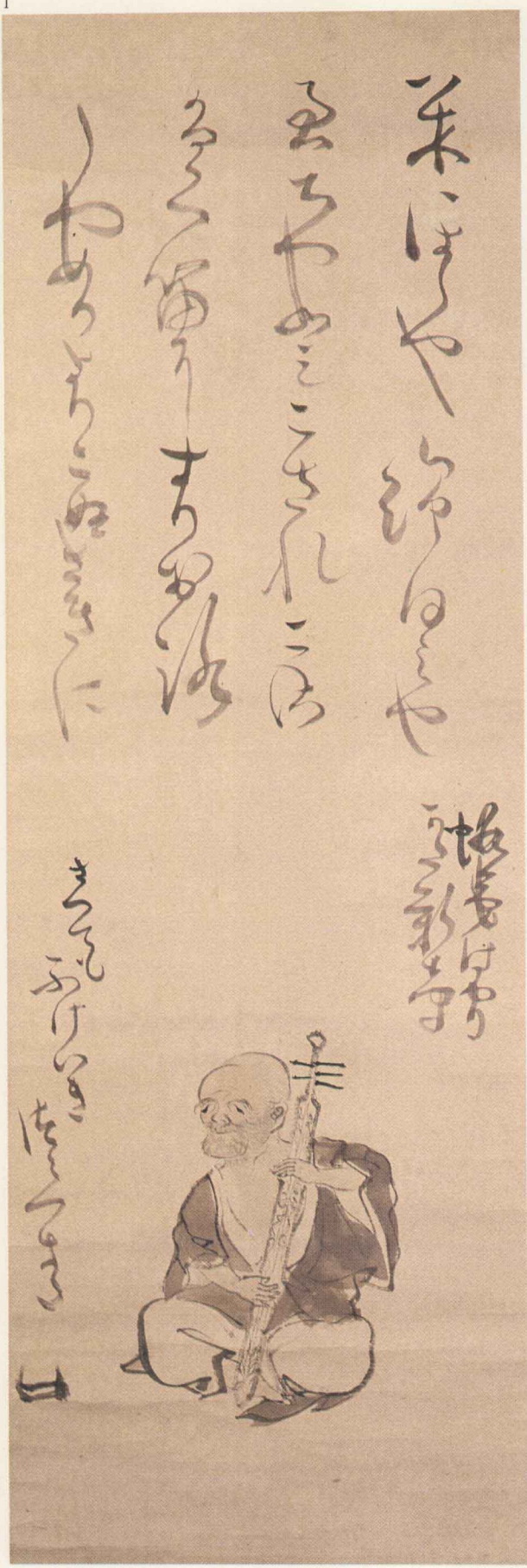
5 本巻の図版写真および資料の収集にあたっては、その所蔵者・管理者・提供者・撮影者など、関係者各位のご好意とご協力を賜った。

〈第二七巻・執筆者〉

国文学研究資料館教授	松田 修
慶応義塾大学	堤 邦彦
共立女子大学講師	内田保廣
東北大学教授	辻 惟雄
神戸大学助教授	野口武彦
京都大学助教授	日野龍夫
名古屋大学助教授	河野元昭
東京都立大学助教授	高田 衛
小川流煎茶家元	小川後楽
学習院大学教授	大石慎三郎
国文学研究資料館助手	島原泰雄

〈装幀〉

後藤市三
レイアウト
宇喜多邦嘉
樋口英男

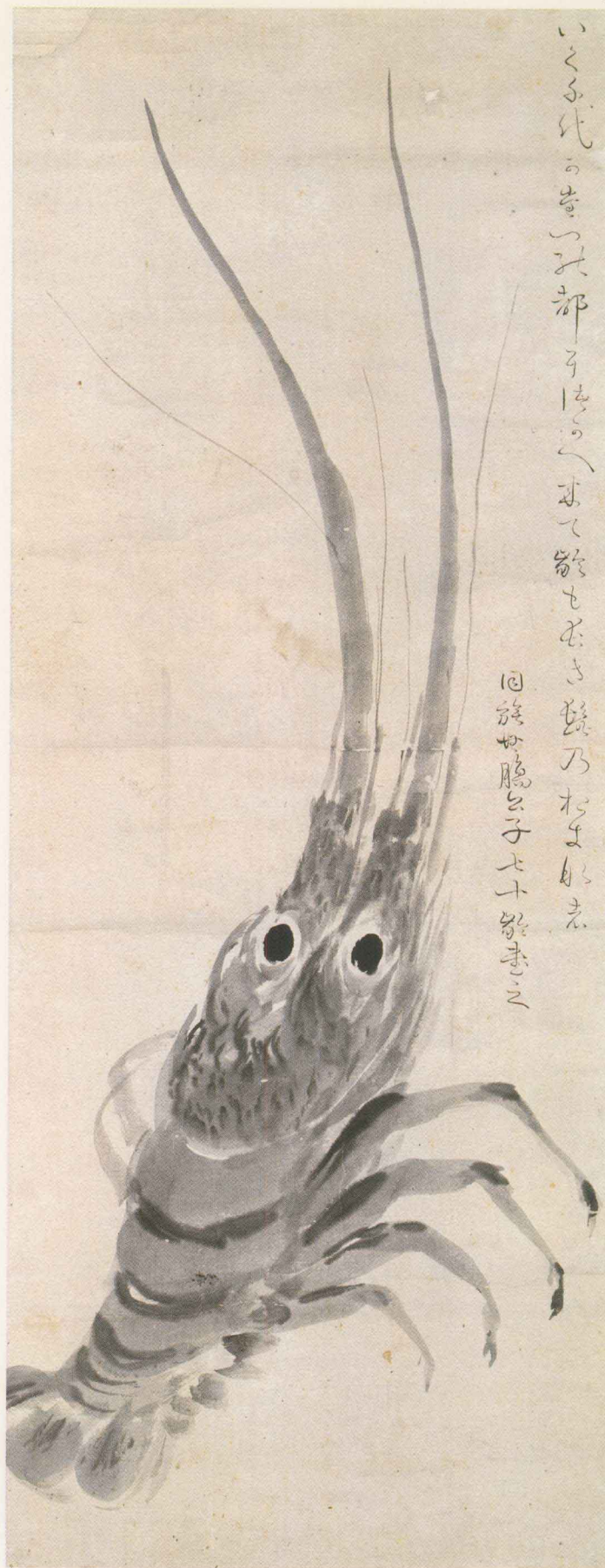


『上田秋成自画賛肖像』・釈文
米ほしや綿ほしや
君ちやとこされこさ
ふく笛にすりおろ
しやめかよりこめさきに
さつても
ふけいき
つらつきた

1 『上田秋成自画賛肖像』——秋成死没の前年文化5年(1808)に描かれた自画賛である。呉春(松村月溪=1752~1811)筆との説もある。蝦夷(えぞ)の楽器を弄ぶ秋成最晩年の姿。花押は蟹形。紙本着色。1幅。／奈良県・天理図書館

いくふ代わきつみ部すはくくもて能もむき髭乃ねまめま

同族無腸公子七十齡書之



『海老自画賛』・釈文

いく千代かたつの都につかへ来て齡も長き髭のおきなは

同族無腸公子七十齡書之

妙法院宮筆・秋成賛『蟹の図』・釈文

無腸

津の国の

なまはに

つけて

うと

まるい

あし

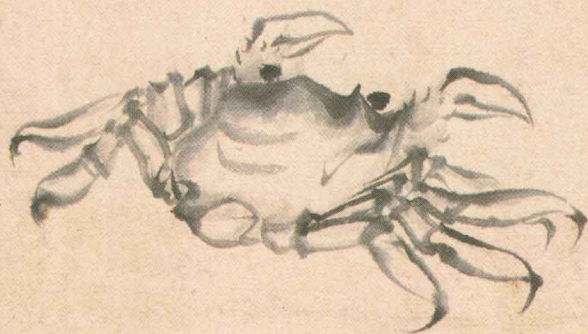
原蟹の

横はしる

身は

2 『海老自画賛』——秋成は安永頃から蟹の異名である「無腸(むちよう)」(また無腸公子とも)を雅号のひとつとしていた。3図の花押も蟹形である。海老は蟹と同じ甲殻類であることから「同族」といった。長寿の海老をことほいだもの。享和3年(1803)70歳の時の筆である。紙本墨画。1幅。／奈良県・天理図書館

享和辛酉仲夏寫



その國に
あるはる
ついでに
あつた
横山
ゆき

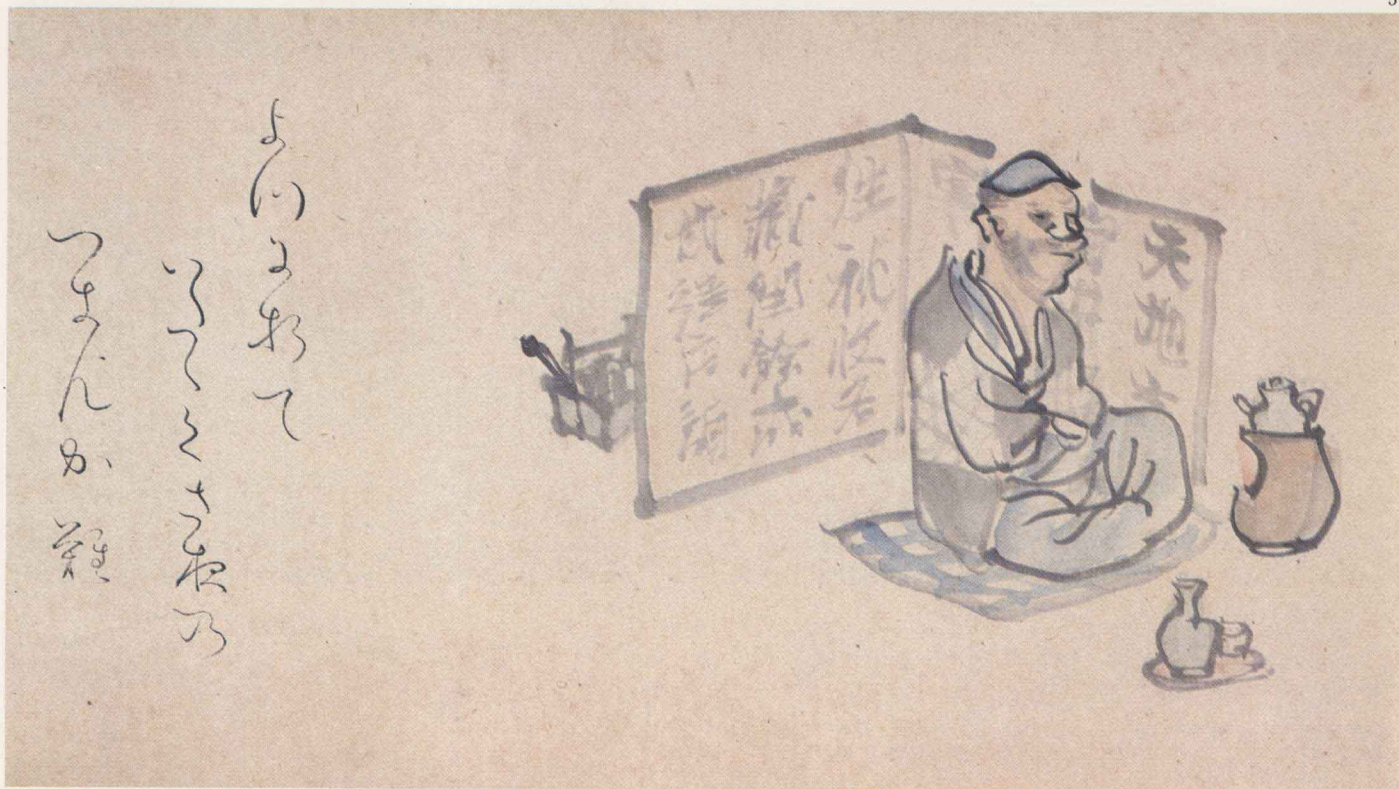


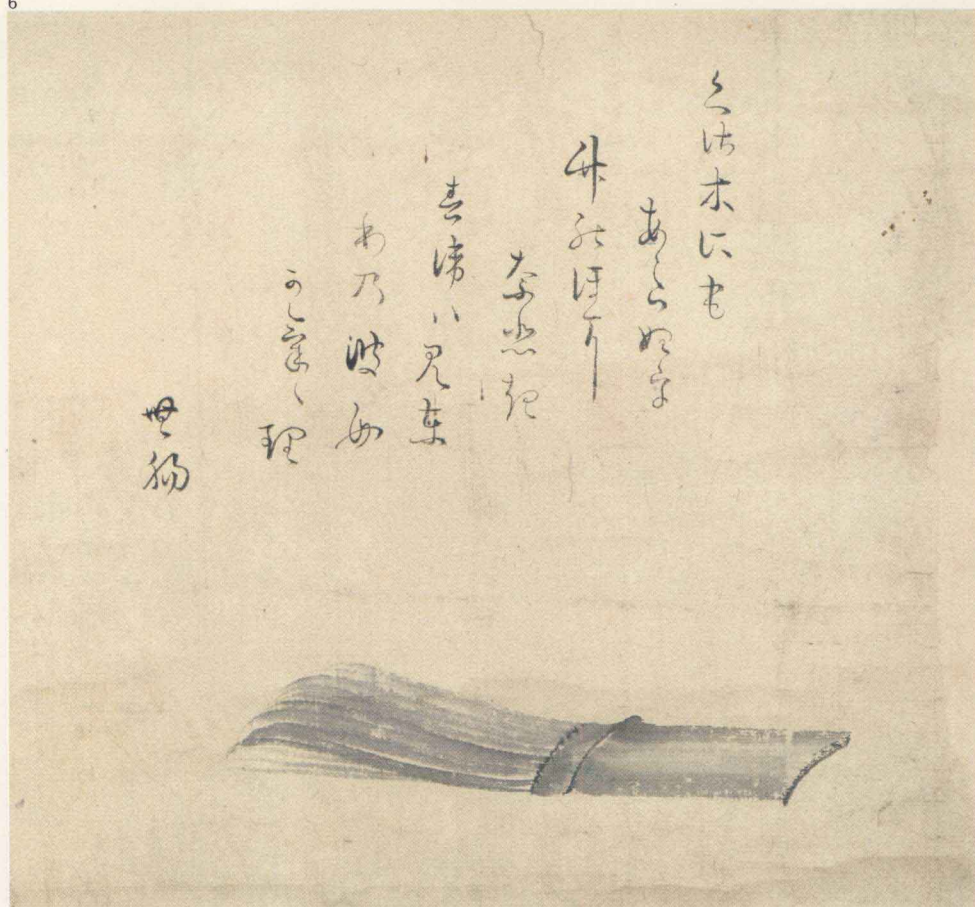
3 妙法院宮筆・秋成賛『蟹の図』
——妙法院門跡一品真仁法親王の蟹の画に、秋成が賛をしたもの。秋成の雅号は初め漁鷗(ぎょえん)であったが、安永頃から無腸(無腸公子)を用いる。無腸は蟹の異名であり、自らの手指の不具の形を自嘲したものというが、安永2年隠棲の地、大坂近郊歌島が古名蟹島であり、近

くの野里は島村蟹で知られていることなども考え合わせるべきであろう。この歌も蟹に托した自嘲である。筆者妙法院宮は風雅の人であり、円山応挙(1733~95)や呉春を寵し、御所はあたかも文人サロンの趣があった。秋成自身も知遇を得た1人である。紙本墨画。1幅。／京都府・永観堂

吳春筆・秋成賛『十二
か月絵巻』部分・釈文
よつに折て
いたゞくさ夜の
つきんかな

4 秋成自筆自伝——自筆草稿の断簡。
巻子本1巻に仕立てられている。これもまた、文化5年死没前年の作である。もともと秋成は、自らを語ることのできる作家であるが、最晩年のものであるだけに、あるいは青少年期を回想し、あるいは亡妻を哀しんで、心をうつものがある。／奈良県・天理図書館





6 『茶筌自画賛』——この茶筌は、通常のものとしては、まことに奇異な形であるが、秋成はおそらく宋徽宗(きそう)皇帝の『大観茶論』の図などを参照して、文人趣味を見せたものであろう。なおこの歌は「木にも非ず草にも非ぬ竹のよのはしに我が身はなりぬべらなり」(『古今集』18・高津内親王か)を踏んでいる。紙本墨画。横懷紙1幅。／奈良県・天理図書館

『茶筌自画賛』・釈文
あらぬを
くさ木にも
竹のほに
なひき
すゑハみと
りの波も
かけり
無腸

吳春筆・秋成賛『急須図』・釈文
涼台 僧寮
道院 松風
竹月 把巻

あて雲に
のりて
あそへる
人すらも
つひの
やとりハ

あるてふ
ものを
松風の俣ニ
なれこし
心には塵も
すゑしと
おもひこそ
しめ

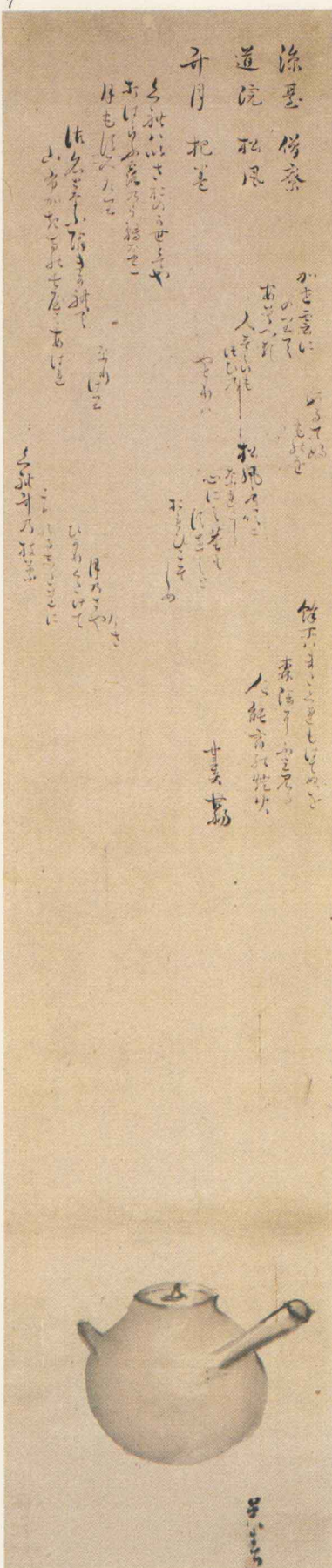
くれハいさわのか世とてや
打はらふ露のうてなニ
月もすみけり

なり
けり
御名となふ隣きかれて
山ふかき寺の長屋はあはれ

けさ
月のさや
ひかりくたけて
ことなるした道に
くれ竹の枝葉

餘所ハまたくれもはてぬを
森陰にふみ見る
人の宵の燈火
七十三寿 無腸

7 吳春筆・秋成賛『急須図』——吳春描く急須に、4首の歌。一見、賛が重く、絵が軽く見えるが、歌は4首ながら涼しく、爽やかで、急須の清雅とよく調和している。吳春と秋成のタイアップ製作中の逸品であろう。第1首「くれハいさ……」の題が「涼台」であり、以下「僧寮」は「御名となふ……」、「道院」は「あて雲に……」、「松風」は「松風の俣ニ」、「竹月」は「くれ竹……」、「把巻」は「餘所ハ……」の題である。紙本墨画。1幅。／山形県・本間美術館



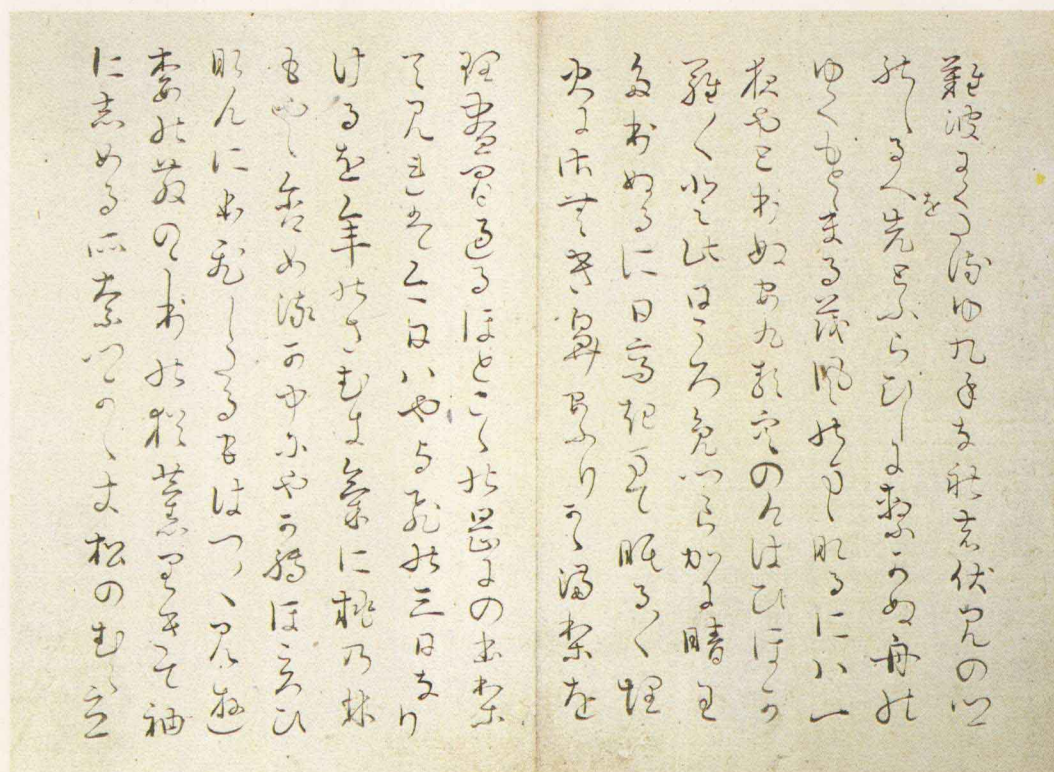
8 冬籠発句——秋成にとつての俳諧は、文芸の出発点であるとともに、終生のものであった。安永(1772~)に入り、漁焉号を捨てたことは、俳諧との断絶を意味するものではない。老人吳く炬燵入りして、さて思うことは久方ぶりに「いろは」でも書こうという、いかにも秋成らしい童(わらんべ)帰りであった。

冬籠発句・釈文
いろは書こゝろに
なりて 冬籠 無腸



9 『江の霞』自筆稿本冒頭——秋成といえ、一般的には『雨月物語』、せいぜい『春雨物語』作者というところであるが、もちろん、初期の浮世草子も面白く捨てがたい。さらに秋成の真骨頂は、雑文というには憚りある風雅な断章である。生涯折にふれて書き留めた量はいかばかりか。散逸したものも多いはずであるが、秋成の全貌をうかがうには漏らせぬ。この『江の霞』と題した紀行短文もそのひとつである。暢達自在の書風も見逃せない。／山形県・本間美術館

『江の霞』自筆稿本冒頭・釈文
難波にくたるゆく手なれば伏見の郷
のしるへを先とふらひしに繋かぬ舟の
ゆくもともまるも風のまゝなるにハ一
夜やとりぬあく空のけはひは
らく／＼此日こゝろつらかに晴わ
たりぬるに日高きまで眠る／＼埋
火にさむき鼻あふりかゝまりを
り屋間過るほとこの岡にのほり
て見れば今日ハやよひの三日なり
けるを年のさむき氣に桃の林
もや／＼あめるか中にやかてほころひ
なんにほひしたるもはつ／＼見ゆ
梅の散のりの猶暮りきて袖
にしめるそなつかしき松のむら立





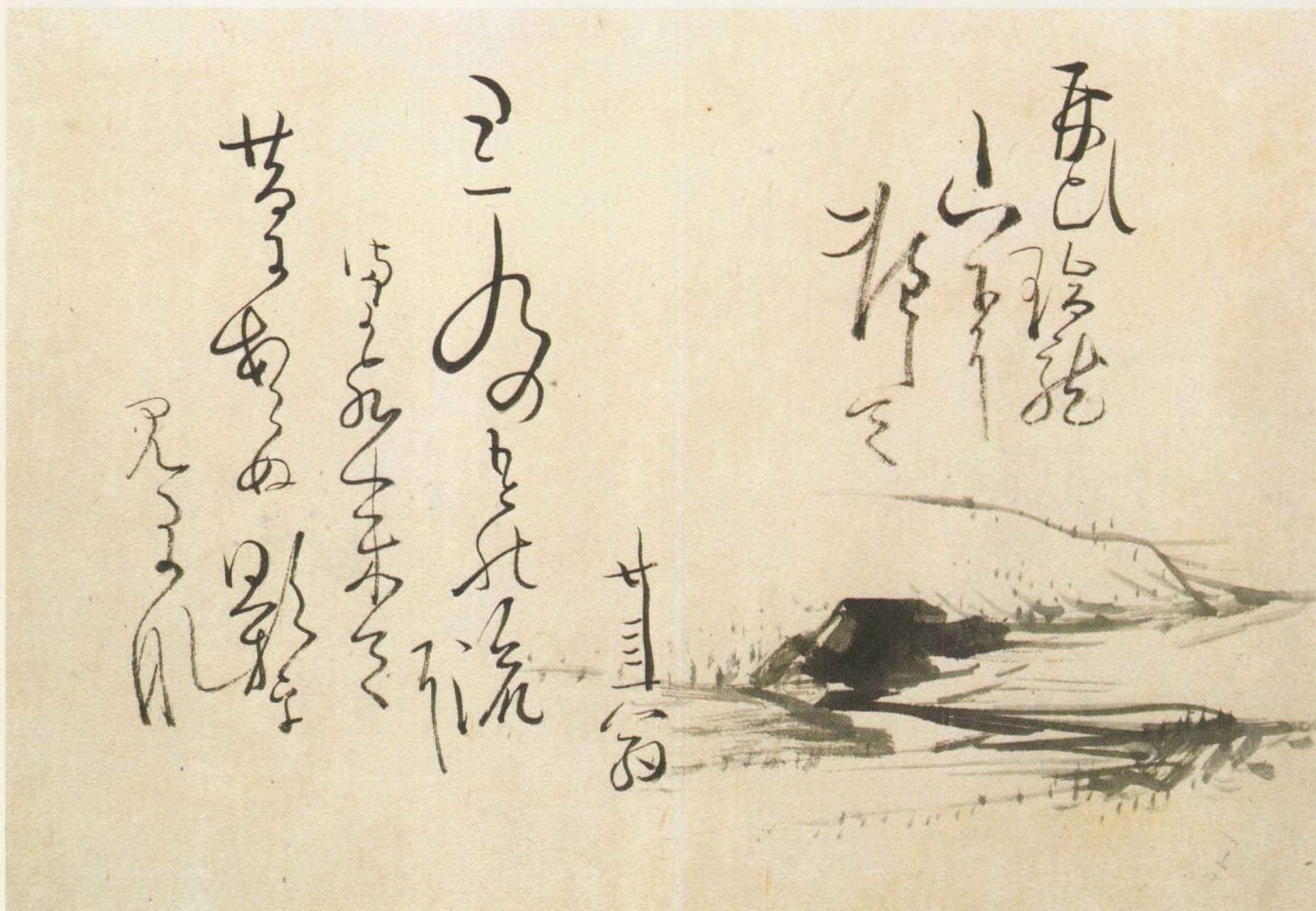
10 賀茂季鷹筆・秋成賛『秋菓図』——筆者賀茂季鷹(1752～1841)は、加藤千蔭(1735～1808)門下の国文学者・文人。京都・上賀茂神社の祠官となり、貴賤上下と交遊ひろく、多才多能であった。紙本着色。1幅。／山形県・本間美術館

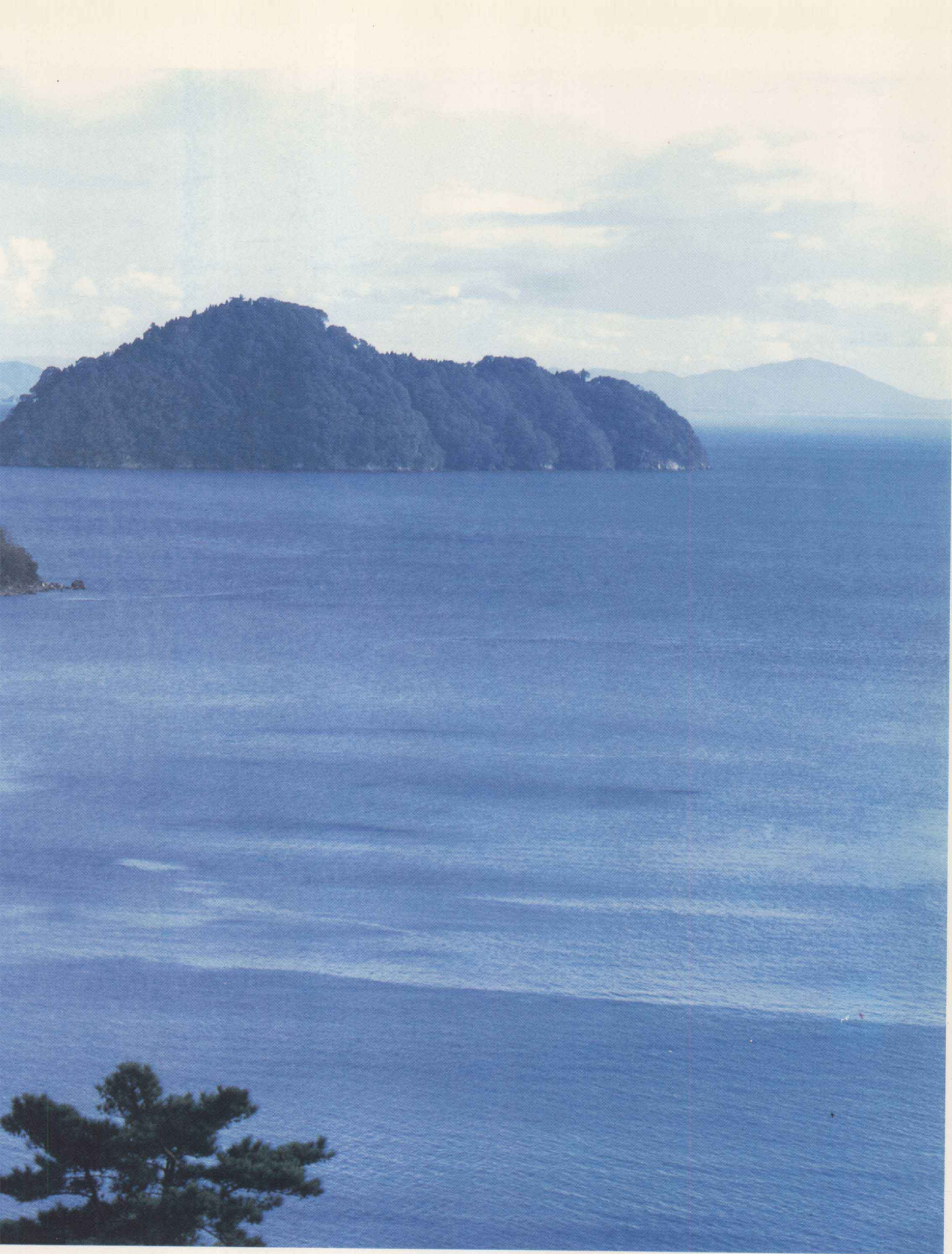
11 『たに水の和歌』自画賛——秋成歌文百十数点を4帖とした『鶉居帖』の一部。文化5年(1808)、定住の地をもたぬ秋成は、瑞竜山南禅寺畔に移居し、以後憑かれたものの如く、自己の文業の決算として『春雨物語』や『胆大小心録』の完成につとめた。昔の影を止めようとするのか、『自伝』もこの頃の試みという。紙本墨画。／奈良県・天理図書館

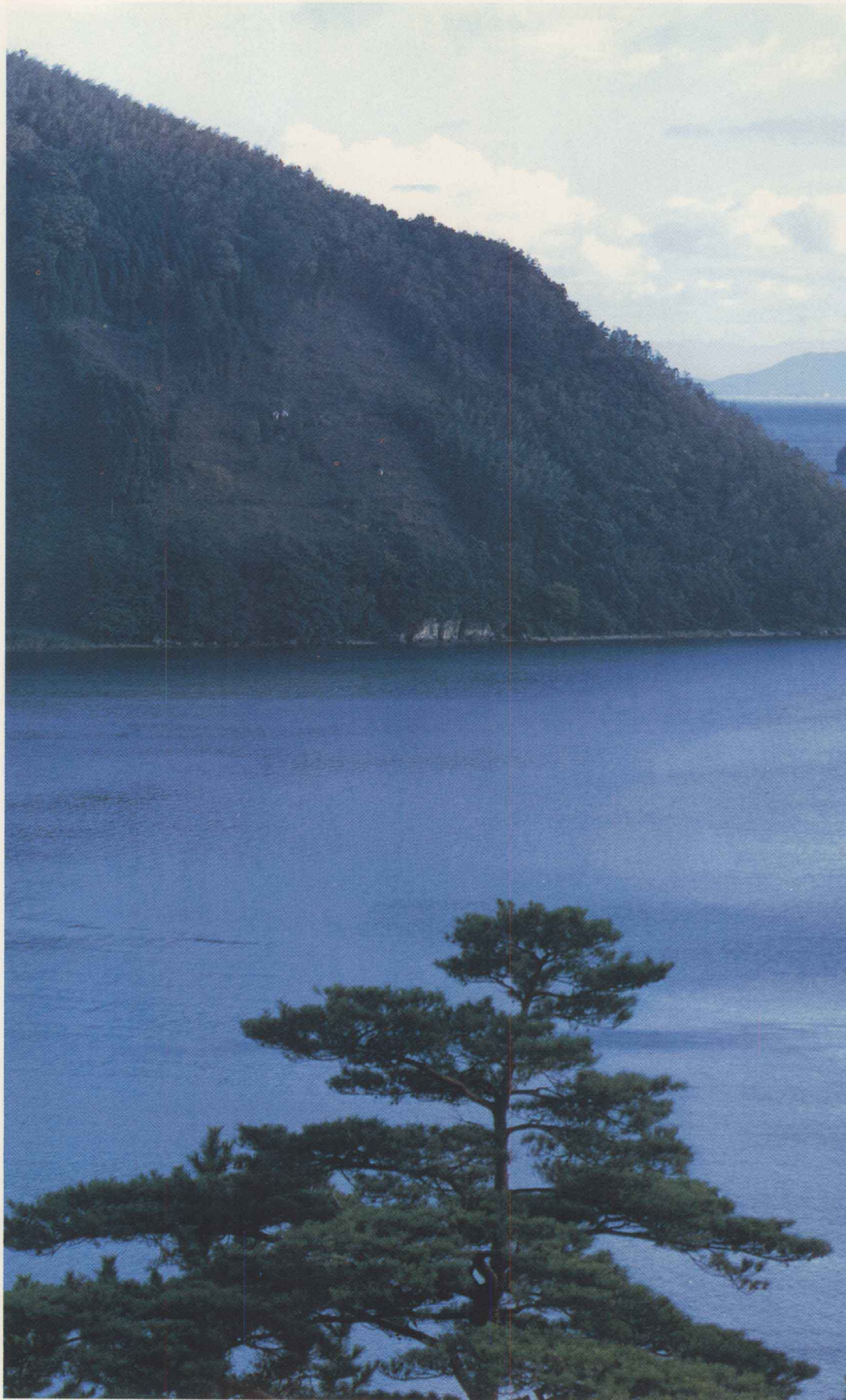
賀茂季鷹筆・秋成賛『秋菓図』・釈文
おもひ入山のいほりをとふ人も
木のえの秋をたのみ来つらむ
世を秋の此身ながらもしふくに
あれとて人のいふかたのものし
秋翁

『たに水の和歌』自画賛・釈文
再び瑞竜
山下に
庵して

七十五翁
たに水のものに流に
まよひ来て
昔にあらぬ影を
見るかな

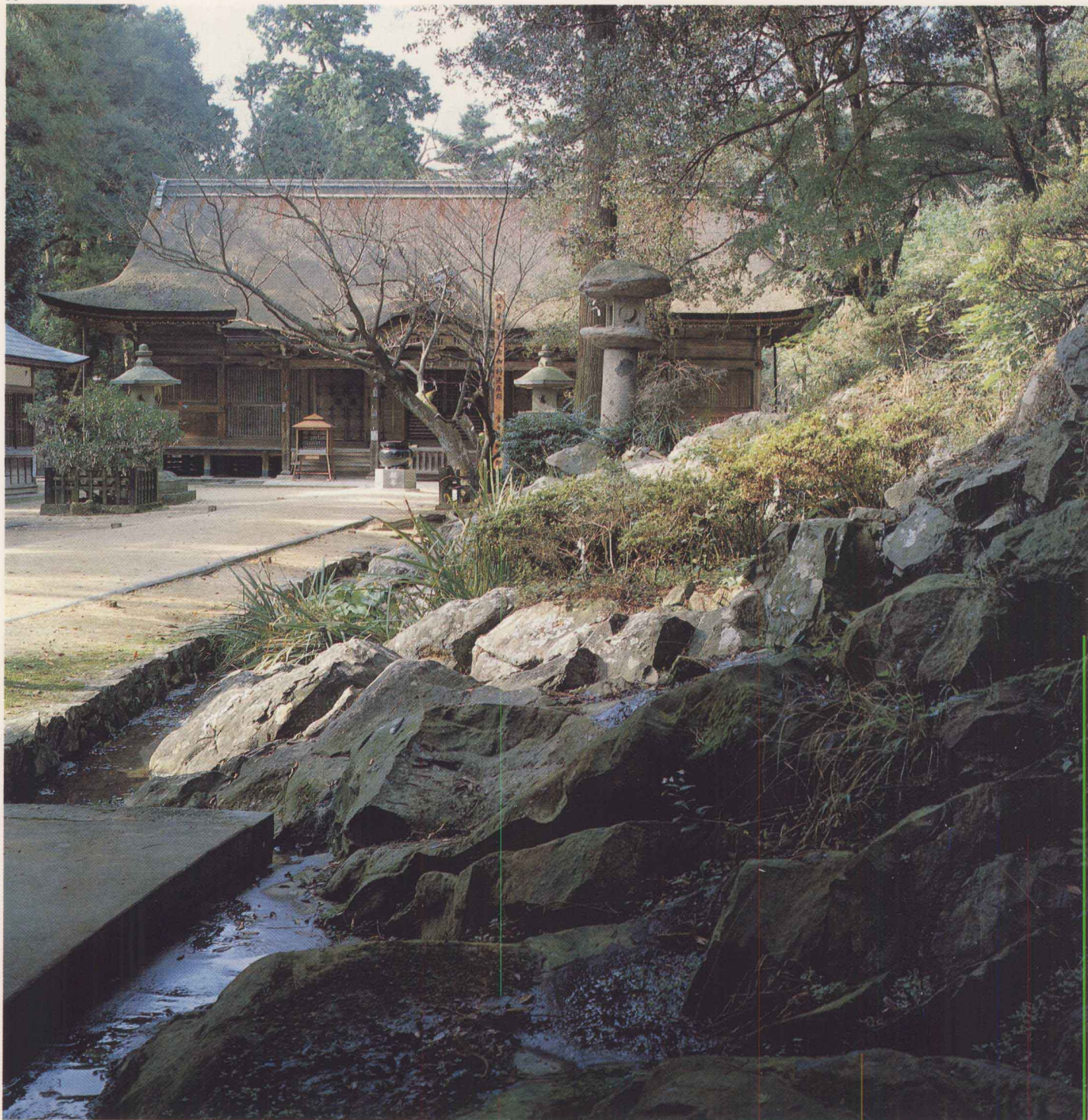






12 琵琶湖の竹生島——能「竹生島」を引くまでもない。古来琵琶湖八景のひとつとして広く知られている。竹生村(現びわ町)の西50町、菅浦から18町、湖上の一小島ながら、汀に接して建てられた竹生島(都久夫須麻)神社の輪奐は、湖水に映じて朱に緑に、人工と自然の調和のモデルといえよう。祭神は本地仏を立てた弁財天である。古歌に「目にたてて誰か見ざらんちくぶ島波にうつろふ朱の玉垣」。まことに、「夢窓の鯉魚」の舞台としてふさわしい。滋賀県東浅井郡びわ町。





14 頼正寺——洞林院白峰寺ともいう。後鳥羽天皇の建久2年(1191), 後白河院によって発願されることとなった。たかだか寺院ひとつで崇徳の怨念が晴れるとも思いがたいが、後白河院にとっては、これで懸案はすべて清算できたつもりか、翌3年、崩御している。本尊は観世音であるが、別に天狗相模坊を祀る。綺麗が尽くされれば尽くされるほど、慰霊鎮魂よりもむしろ怨念が増幅するのではないだろうか。香川県坂出市青梅町白峰寺。

13 高野山の玉川——霊山高野山の中で最も神聖な弘法大師霊廟の側を流れている。今日では細(ささ)やかな潤水に過ぎない。全国に玉川と名に負う川は多く、世に六玉川(むたまがわ)と称されるものは、井手・三島・野路・高野・調布・野田であるが、それぞれにその清冽さを称美されて歌の名所となっている。高野のこの玉川は、小暗い繁みの下を行くものの、毒ありとは見えず、『風雅集』の詞書は、秋成が「弘法僧」で論ずることく、後人のさかしらか、訛伝・誤録であろう。和歌山県伊都郡高野町。